

風 宮田守男

(現場)からの

明治初期の5月頃、アメリカから黒板が輸入され、今日「5(ご)9(く)ばん」の語呂合わせから黒板の記念日。学生時代に先生が柔らかなチョーク

で書いた文字を必死にノートに書き写した時代が懐かしい。

新入社員の中には、仕事に追われ、泣き言をこぼす人がいるかもしれない。緊張した1

カ月。いまは「まけるな」以上に「いそぐな

いそぐな」の心掛けが大事だ。イソップの寓話に、

大きな荷物を背負ったロバが沼で転んで立ち上がれなくなると叫び続けると、それを聞いていたカエル

が言った。「ちょっと転んだだけで、そんなに泣くのなら、おれたち

ほど長く沼にいたとしたら、どんな騒ぎに

なったことか」。世界中には誰もかもっと大きな不幸に耐えているのに、わずかな苦痛も我慢できない人を戒める話である。

ストレスのはげ口として執拗なクレームが増え続ける現代社会。

「伝わらない声と言葉」が問題を複雑化する

トランプ米大統領が世界を威嚇する「危険なゲーム」の貿易戦争。「アフリカのことわざ」のケニアのことわざに「象たちが戦えば、苦しむのは草たち」。古くは王様同士

の争いに巻き込まれ、

苦しむ村人や子どもたちに向けて使われていたという。大国の争いが深刻化すれば、世界への影響は甚大だ。巻き込まれる人々の苦難ははかり知れないのだから。

明治維新の立役者、

西郷隆盛の教訓に「明るい場所にいる者は、暗い所にいる者を見ることはできない」と残している。またド

ジャースで数々の偉業を成し活躍する大谷翔平は「真剣にやっついたら知恵がでる。中途

半端だと愚痴が出る。いい加減だと言いつばかり」と戦国武将・武田信玄の言葉を大切にしていると知られている。一人一人が他人事

と考えず、乗り切るべき知恵を学ぶ大切さが今求められている。

日ごとに鳥たちのにぎやかなさえずりに目を覚ますことが増えてきた。今は野山に緑が

少なく、伸び盛りの木々の葉も少なく、枝に止まる鳥たちの姿を容易に見ることができ

る時期だ。鳥や動物の鳴き声を人の言葉や文字に置き換えて覚えやす

くした「聞きなし」を実感する楽しみがある。

ウグイスの「法華経」、キジバトの「年寄り来い」、ホトトギスの「東京特許許可局」などが有名だ。

鳥の囀りが貴方にはどの様に聞こえるのだろうか。

(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)



早朝、エサを求めて人家に近い耕作地にカラスの集団。鴉(からす)はガーガーと鳴くとの理由で漢字が作られたそうだ